

## 前大戦と科学者

石原 純

何かの「思い出の種」を書いてくれとのことだが、漫然と昔の記憶をたどつてみたところで、どうも何をとり出してよいものか、一向に見当がつかない。仕方もないから先ず今度の歐洲戦争と幾分のつながりあるとも思われる前世界大戦のことも思い出すことにしてみる。尤もそういつたところで、どうせ私のことであるから、話は何れは学界のことに落ちるのがせいぜいだが、さてそれにつけて古い「アララギ」を繰りひろげてみると、ちょうど大正四年の十月号に、何かといろいろな感想を述べた序ついでに、私はこんな風な事ことがらを書いてる。

世界の共有であるように思われていた学術が、歐洲大戦乱の影響で著しく国家的色彩を帯びさせられた。ドイツの或る純学術雑誌の毎号の巻頭には、祖国のために尊い犠牲となつた学者を記念する追悼文が大きな文字で黒枠に囲まれて載せられている。ベルリンの或る物理学者が、昨年夏濠洲で開かれた大英聯合学会に出席した。「彼が濠洲に着いた時は、既に戦争の始まつた後であつたけれど、それでも賓客として学会に列つらなることができた。ところが彼は陸軍の予備将校であつたから、もちろん帰国を許されなかつた。しかも今や彼は——大英学会の会員として、且つ濠洲政府の賓客として——監禁所に束縛せられている。」

こんな記事を私は同じ雑誌で読んだ。

やかましい議論はさて措おいて、私はここではともかく事実を記しておけばよいと思うのだが、何しろ戦争はそのときいろいろな点で学界にも深刻に響いて来たのであつた。有名なX線の発見者であつたレンチェン教授も、イギ

リスからもらった賞牌をつき返してしまつたとも伝えられた。戦線では、たくさんの学者が戦死した。そのなかで私たちにとって最も惜しまれたのは、当時有数な天文学者であり、また数学や理論物理学の上でも素晴らしい業績を残している、ポツダム天体物理観測所長シュヴァアルツシルド教授の戦死であつた。なぜ、その際これほどの人も犠牲に供しなくてはならなかつたのかは、今考えてもちよつと想いの外である。

そういえば戦争のごく初めに、ベルリンのカイザー・ウィルヘルム物理化学研究所で爆薬実験の際に大爆発が起つて、若い有為な物化学者ザックル博士などがその犠牲になつたことも大いに惜まれたのだつたが、これは学問に縁のある仕事の結果であつたから、まず諦めもつくというのでもあろう。だがそうでもなくて、徒らに戦場で得難い学者を失うのは、大いに考えものである。イギリス側でもX線スペクトルの研究で名高いモーズリーなどという年若い有為な学者を、トルコの戦線で失つたのであつたが、今度の戦争では、こんな過誤を再び繰り返さないように十分に用意していると伝えられているのは、恐らく至極当然のことであろう。

ところが、その間に例のアインシュタイン教授はドイツに国籍を置いていなくなつたおかげで、あの有名な相対性理論をやがて完成することのできたことなどは、何かしら戦争に対する一種の皮肉とも感ぜられてならない。

その頃のドイツの雑誌や書籍には、ちようど今我々が手にするような黒ずんだ藁紙わらがみみたいな紙がつかわれていて、おまけに、ふだんはまるで見られなかつた誤植の文字が諸所に眼についた。それでありながら、あの大戦中に純粹の学術論文が絶えずそういう雑誌に発表されていたのだから、これは確かに驚くべきことにちがいない。

ところが、そのなかでもドイツ学界の最大の誇りを示すに十分であり、やがて戦後になつて、世間に知れわたつてからは一般の思想界をまでも風靡するに至つたあの相対性理論が、今ではドイツにおける政情の変化によつて、専らユダヤ的独断論として痛烈に排撃されるようになったことは、まことに夢のような話である。

もちろん学界自身では今でもこんな議論はまじめに相手あいてにしてはいないが、それでもドイツの国内では、うかつに

大きな声では、それすらしゃべれない有様になっている。そして純粋な学問上の論文すらもナチスの検閲官が逐一検閲することである。こうなると学問は益々狭く閉じこめられてしまつて、殆ど動きがとれない奇妙な形にされるよりほかはないので、これはどうも学者たちの眼には、いかにも空恐ろしい世のなかではある。

さて、それにつけての私の思い出の一つであるが、現にこのナチス的政治論を学問の上で最も強く主張し、ユダヤ人の創説した一切の学説を支持する人々をまでも、その追隨者として口を極めて罵倒しているのが、ドイツの物理工業研究所長として、ひどく国内に幅を利かしているシュタルク教授なので、ところが、ふしぎにもこのシュタルク教授が以前に私と或るちよつとしたつながりをもっていたのだからおもしろい。

元来が、この人は昔からユダヤ人嫌いで、アーヘン大学の教授をしていた頃から妙にその学説を攻撃し、殊にアブラハムの電子理論などにその鋒先を向けていた。そして遂に学界で多くの人々と折り合いがわるくなつて、実業界にとび出してしまい、その後ナチス政治になつてから、いわば時勢に便乗して返り咲きしたというわけでもあつたのだ。ところで、そのアーヘン時代には「放射能及び電子学年報」という學術雑誌を主宰していた関係から、之に相対性理論に関する総合報告を書いてくれという手紙を私の許によこしたことがあつたのである。それは一九一一年の終つたことで、私は仙台にいて、翌年の春に歐洲留学に出かけることになつていたのである。ともかくその言に応じて急いで一篇の報告をまとめてシュタルク教授に送つた。これは早速その雑誌に載せられたばかりでなく、それに対するかなりな原稿料を私は教授からうけ取つた。

この話はそれだけなのだが、さて今になつて思い出してみると、シュタルク教授が今日躍起になつて攻撃している相対性理論に関する原稿を、教授自身の需めによつて書いたということが、第一におかしなことにもなるし、おまけにその報酬までも存分にもらつているのだから、これも今さら皮肉に考えられるわけでもある。どうも妙な思ひ出話になつてしまつたが、とかく人間の世のなかというものはこうした矛盾に満ちているのかも知れない。(昭



- 底本には、『科学のために』（科学主義工業社、一九四一（昭和十六）年一月二十五日）を使用した。
- 読みやすさのために適宜振り仮名を追加した。
- 旧漢字は新漢字に、旧かな使いは新かな使いに変更した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。